

艶容女舞夜

七

下巻

酒屋の段

〔解題〕

安永元年十二月廿六日から豊竹座興行。作者は竹本三郎兵衛・豊竹應律・八民平七・元祿八年十一月

六日の夜、大阪長町四丁目の美濃屋平左衛門の養女おさん事藝名三勝（湯女とも、女舞ともいふ）と大和五條新町の赤根屋半七とが大阪の下難波村の千日墓所南側の石垣の下で情死した。町中の評判となつたので、大阪の岩井半四郎座では早速これを仕組んで翌年の正月二日から「茜の色揚」の外題で、美濃屋平左衛門に岩井半四郎、みのや三勝に花井あづま、赤根屋半七に杉山勘左衛門、おつうに岡本松之助といふ役割で演じて大當りを取つて、百五十日間興行を續けたといふ。これによつて三勝半七の心中はいよく名高くなり、京都の都音頭としても歌はれ（寶永元年刊行の落葉集所載葛山四郎兵衛作三勝心中）、また「三勝心中」と題した歌祭文としても流行した。

かやうな傳統と人氣とを有つ二人の情死の廿五回忌を當込んで始めて淨瑠璃に作つたのが紀海音の「笠屋三勝廿五年忌」である。本曲の著作上演年代に關しては、情死後十五年日の寶永六年八月であるとするもの（外題年鑑）、享保元年とするもの（南水漫遊）などがあるけれども、廿五年正當とすれば享保四年となるわけで、疑問の餘地があるやうに思はれる。本曲では美濃屋三勝を寛永頃の名高かつた女舞の座元笠屋三勝に附會して、二人の情死の原因は、三勝の伯父平左衛門に四貫五百日の金を貸した今市の善右衛門が、その金のかたに三勝を奪はうとするが、勘當の身の上の半七はこれに對抗し得ないが爲であるとし、又半七は國許におすがといふ貞節な女房があり、おつうは伯父の許で三勝の母と共に養はれて居るといふ風に仕組まれて居る。

この改作として出たのが「浮名茜染五十年忌」と角書をつけた春草堂の作「女舞劍紅楓」（延享三年十月）である。本曲では笠屋三勝をまた元的美濃屋三勝とし、その兄に勝次郎といふ放蕩のために勘當された男があつて、それが後に半七の罪を引受ける役廻りに立ち、又半七の父を半兵衛とし、半七の許嫁の妻お園は既に三年越し半七の實家に引取られて居るが、半七はお通まで儲けた三勝とのみ深く契つて居る。そして半七は廊の意地で誤つて悪手代長九郎を殺して、遂に三勝と共に情死するといふ風に仕組まれて居る。この筋立を受けて更に新工夫をこらしたのが「艶容女舞衣」で、お園の父宗岸を點出した事、お通の守袋から遺書が出て、それ

を讀む一同が悲歎にくれる事、餘所ながら最後の暇乞に來た二人が死なずに助かるやうになる事などが特に變つた趣向で、それがこゝに收めた下巻の酒屋の段として仕組まれて、全篇の山となつて居るのである。

へこそは入相の。フシ鐘に散行く花よ、れ去なれたからは。こちの内に用はな。管。コリヤ宗岸が一生の仕損ひ。と悔りも。あたら盛りを獨寝の。お國を連い。何の爲にござつた事。地と針持んでも跡の祭。國めも晝夜泣き悲しみ。れて父親が世間構はぬ十徳に。丸い頭つ詞に妻は氣の毒。調ア、これいの親朝夕も進まねば。もしや病が發らうかの光さへ。オクリ子故に。フシくらむ黄父殿ホ、ホ、ホ、。イヤモ人様にと。見て居る親の心は闇。おれも天満昏時。地主の妻は灯をともし表をしめ追従いはぬ偏屈なちの人。必ずお氣に年古う住んで居れば。人に理窟もいにいそぐと。出會ひがしらに。調ホに障られて下さりますな。此間は。嫁ふ者なれど。誤りは詫びねばならぬと。ホ是はく宗岸様。そちらに居やるは女の歸つて居られます。いかいお世年寄の面おし拭うて來ました。何かのお國ぢやないか。アイ母様。お變りも話でござりませう。何のく。半兵衛事は了簡して。今迄の通り。嫁ぢやとござりませぬか。地といふ挨拶もどこ殿の立腹は皆尤も。三勝とやらに心奪思うて下され。コレ頼みます御夫婦。地やらに痴持つ足の踏みどさへ。低き敷はれ。夜泊り日泊りして。女房を嫌ふとあやまり入つたる挨拶に。お國もう居も越えかねる。宗岸は遠慮なく。調半七。所詮末の詰らぬ事と。無理に引ちく。フシ手をつかへ。地父様の一半兵衛殿お宿にか。地と娘を連れて打つ立て去んだのは。娘に引けを取らず徹で。無理に連れられ歸りしが。一旦通れば。妻は門の戸引立て、サア、まい爲おれが氣迷ひ。それから思案す殿御と極つた半七様。嫌はれるは皆わ先づお上り。なされませとフシ奥底もるに付け。唐も倭も。一旦嫁にやつたたしが不調法。鈍に生れた此身の科。なき詞の内。地それと聞くより半兵衛娘。嫌はれうがどうせうが。男の方か。調今から随分。お氣に入る様に致しませう。一間を出づるしづく顔。調娘を連れら追出す迄。取戻すといふ理窟はないせう程に。やつぱり元の嫁娘と。地お

つしやつて下さりませお二人様とヌエテ
跡は詞も。涙なり。詞オ、何のマアそ
つちさへ其心なら。こつちは變らぬ嫁
姑。ナウ親父殿。さうぢやないか。イ
ヤさうぢやない。昔唐にも例がある。
太公望とやらいふ人の妻。夫に暇取り
月日を経て託言に來りし時。鉢の水を
大地に明けさせ。其水を鉢へ入れよ。
元の如く夫婦にならんと。太公望がい
はれたと。いづぞや講釋で聞いて來た。
それと丁度同じ事。こなたの方から無
理暇取つて。今更嫁と思へとは。モ何
時まで言うても返らぬ事。口詞たゝか
ずと。早う連れて去なつしやれ。エ、去
なつしやれと。地にも。しやゝりも
納戸口。フシ顔を背けて。居たりける。
詞オ、その腹立ちは尤もく。が重々
不調法は。この天窓に免じ了簡して。
どうぞ嫁に。厭でござる。悴めは勘當

したれば。嫁といふべき者もない筈。や何故と。嫁はうろノ女房も取付き
サアそれも懲しめの爲當座の勘當。イ 歎けば宗岸が。詞イヤまだ驚く事があ
ヤ當座でない。七生までの勘當。ム、其る。翌の半七は人殺し。お尋ね者に
また七生まで勘當した半七が代りに。 つたわいの。地と聞くより二人は又悔
こなた
は何で繩
をかうつ
た。ヤア。
サア半七
とは。親
でも子で
もないこ
なたが。
今日代官
所で。何
の爲に縛られて戻らしやつた。地と思ひ。それは何故どうした譯。様子を聞
ひも寄らぬ宗岸が。詞に悔し驚く女房。かしてコレノ半兵衛殿。と問へども
嫁も共々立寄つて。肌押し脱せば半兵衛 更に返答は。フシ差俯向いて詞なし。
衛が。小手を弛めし羽交締。ナウ情な。地宗岸涙の目をしばたゝき。一昨日の

舞紅楓 作者春州堂
十年忌 女舞紅楓
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを
おのゝこゝろのあはれを

頭卷の「楓紅舞女」

そ道理なり。半兵衛やう／＼顔を上で了うたら。斯うした難儀は出来まい。小母々々。地とお園が膝に寄添
げ。言葉はねばならぬ事もあれど。孝もの。お氣に入らぬと知りながら。未練ふ子の。顔見て悔り抱き寄せ。詞ヤア
行な嫁女の手前。胸につまつて言ひに私が輪廻ゆる。添臥は叶はずともおへはどうしておちやつた。地フシと不思
くい。宗岸殿。奥の間で言明かさ。傍に居たいと辛抱して。是まで居たの
コレお園。そなたをさら／＼嫌ふぢやがお身の仇。今の思ひに比らぶれば。議ながらも抱上ぐれば。地半兵衛宗岸
ない。氣に懸けてたもるなや。舅殿へ一年前にこの園が死ぬる心がエ、付か母親も。一間の内を轉び出で。詞オ、
話す内。暫く爰に。地と三人はしを／＼なんだ。堪へてたべ半七様わしや。こコレ／＼嫁女。忝いその心。障子の内
奥へ泣きに行く。フシ心の内ぞ哀れな様の様に思うて居ると恨み。カンつらみはで聞く度に。拜んでばかり居たわい
り。地フシ跡には。園が憂き思ひ。かゝ増るフシ憂き思ひ。詞明日は疾うからくは此子の事。美濃屋のお通と言はし
れとしてしも鳥羽玉の。長世のあちき父様に。又連れられて天満へ去に。半やつたは。半七と三勝の。アイお二人
なさ身一つに結ばれ解けぬ片糸の。緑七様のひよつとした。はかない便りをの中に出来た。お通といふは此子ぢや
返したる獨り言。詞今頃は半七さん。聞くならば。思ひ死に死ぬである。とてわいな。ヤア／＼親父殿聞かしやつた
どこに如何してござらうぞ。地今更返らぬ事ながら。わしといふ者ないならも浮世は立たぬ覺悟。嫌はれても夫の内。此家で死ねば後の世の。もしや契り
ば。舅御様もお通に免じ子までなした内。此家で死ねば後の世の。もしや契りナ、何で捨子にしてこちへおこし
る三勝殿を。疾くにも呼入れさしやんの綱にもと。地最期を急ぐ心根は餘所た。こりや譯があらう。喚懐かどこ
したら。半七様の身持も直り。御勘當の見る目もフシいちらし。地フシか。見や地といふ内に。わくせき明ける守
もあるまいに。思へば／＼この園が。る哀れも知らぬ子の。泣聲に目や覺し袋。内よりばらりと落ちたる一通。取
上去年の秋の煩ひに。いつそカン死んけん。一間を出でて。詞乳もう乳がもみ

る間おそしと、フシ封押し切り。詞ヤアの難儀。人を殺せし身と成りゆへば。ウ半兵衛殿。宗岸殿。思ひ廻せば廻す何ぢや書置の事と書いてある。ヤア思ひ設けぬ御別れ。エ、そんならやつぱり半七様は。オイナウ嫁女。善右衛門を殺しましたわいなう。ハア。あの門を殺しましたわいなう。ハア。あの十度契りて親子となる父の御恩。善右衛門といふやつが。大抵や大かたは山よりも高きとの世の教へ。我が身悪い奴ぢやないわいの。あんな悪者でも喧嘩兩成敗。我が子の命を解死人にも弁へ居りゆへども。その御恩も得とらるゝと。思へば、宗岸殿。口惜しいわいの。地無念にござると述懐涙。見聞くお國は以前の剃刀。南無阿彌陀佛と覺悟の躰。是はと驚く母宗岸。叶はぬ手にも半兵衛は。やうく御座ゆて。殊にかよわき生れつき。不いの。聞聞いてゐるさの障子より洩れ。出づる月は牙ゆれど胸の闇。詞エ、時置き。死なうとは胸窓ぢやわい。今日まで永らへゆへども。所詮助からも時と隣の稽古。そして其跡は何と書いてあるぞ。アイ。母様の御養育。海して殺して下さんせ。オ、娘尤もぢやより深き御恵み。親父様の御機嫌悪い時には。陰になり日向になり。幾千と。閑流したも今身の上。水々としたの。エ、私の小さく成りしと思召され。御養育の御世話の程。くれ。

増しであつた。愛らし盛りの此お通。なや。不孝を赦させ給はれと。悔み歎
半七と一所に暮すなら。よい楽しみで。けば三勝も皆我故の御事と共にわび入
あらうもの。コレ婆見やいの。アレ何。る中に半七。調いつまで泣いても返ら
にも知らず。手打やあばぐばかり。ぬ縁言。親父様の御繩目。早うほどこは
オイノ。こりや孫よ。モウ父も母もな。身の最期。イザ／＼急がんサアおちや
い程に。此婆と一所に寝いよ。とは言。地と。立上りしが今生の。別れにせめ
ふものゝ乳もなく。今から先の寝起き。て御顔をと差覗けば三勝も。お通を一
にも。嘸や歎かん親々が。知らずに居。目と仲上り。見れども親子隔ての關。
るが胸慾者。地むごい心いぢらしやと。何と千萬無量の思ひ。兩手を合せ伏拜
いふ壁洩るゝ三勝が。思はず乳腹を握。み。おさらば。おさらばといふ聲も。
りしめ。調乳は爰にあるものを。飲ま。歎きに埋む我が家の内見返り。見返り
してやりたい顔見たい／＼。乳が。地張。死に行く。フシ身の成る果てぞ哀れな
るわいなうと身を震はせ。駈入らんも。地半兵衛はつと心付き。調この書
關の戸に。空音もならず羽拔鳥。親は。置の文体では。今宵最期と極めし半七。
外面に血の涙。子はやすかたの安から。宗岸殿も手分けて。行方を尋ねんサ
ぬ。悲しさ迫る内と外。一度にわつと。ア早う。地／＼と身繕ひ。フシ立
湧出づる涙浪花江泉川小きんを。フシ汲。出でんとする所に。地思ひがけなく表
出す如くなり。地半七は齒を喰ひし。より。調ヤア／＼傍々。善右衛門を殺
め。かばかり深き御情是非もなや勿體した科人。茜屋半七。召捕つたりと呼
言の葉を。爰に寫してとゞめけれ。